

SPELT

March 2024. Vol.12, No. 2

実用英語教育学会

NEWSLETTER

目次

巻頭言

実用英語教育学会 会長 釣 晴彦

第 13 回 実用英語教育学会 (SPELT) 研究大会 報告
(2024 年 2 月 17 日 Zoom によるオンライン開催)

ビジョン 3-16 : 地域の視点を通じた英語教育実践

1. 実践報告 1

「多様な視点で地域を捉える英語を通じた探究学習

— 苫小牧高専 English Camp の取り組み—

報告者 : 鈴木 修平 先生 (苫小牧工業高等専門学校)

谷口 陽子 先生 (苫小牧工業高等専門学校)

(報告 実用英語教育学会 三浦 寛子)

実践報告 2

「地域とともに地域で学び社会と繋がる」

報告者 : 森長 大輔 先生 (北海道上川高等学校)

(報告 実用英語教育学会 竹内 典彦)

2. 研究報告

「留萌市における小中高 CAN-DO リストを用いた英語力育成の取組について」

報告者 : 滝本 有香 先生 (留萌小学校・留萌管内教育研究所員)

(報告 実用英語教育学会 杉浦 理恵)

3. お知らせ

実用英語教育学会会長 釣 晴彦
北海道文教大学 教授

2月17日に第13回総会・研究大会をZoomにて終えた。休日にも関わらず参加していただき皆様に感謝申し上げます。今回は、「ビジョン3—16：地域の視点を通した英語教育実践」として、2本の実践報告と1本の研究報告があった。

1本目の実践報告は苫小牧工業高等専門学校の鈴木修平先生と谷口陽子先生が共同で「多様な視点で地域を捉える英語を通した探求学習—苫小牧高専 English Camp の取り組み」として発表した。職場の同僚と共同で学生の体験学習をフォローしそれを検証することは、今後の持続したプロジェクトを支える上では大事な研究になる。地域に求められていることを探求して学習活動に結び付けていくことは今正に教育に問われていることである。ガストロノミーツーリズムという言葉が、地域再生というキーワードの視点でよく最近耳にする。地域の文化、食を発信することで地方の観光や経済効果に貢献することを意味している。

もう1本の実践報告は、上川高校の森長大輔先生が「地域とともに地域で学び社会と繋がる」というテーマで発表した。SDGs のスローガンの活用を通して実践していく報告である。Google Jamboard を上手に活用してアイデアを描画する活動など、いろいろ工夫された計画の実践活動報告であった。是非このような教育活動は継続してもらいたい。

研究報告としては、留萌小学校・留萌管内教育研究所員の滝本有香先生が、「留萌市における小中高 CAN-DO リストを用いた英語力育成の取組について」というテーマで発表した。滝本先生個人の教育に対する情熱が伝わる報告だった。小・中・高の現場で実際に活用でき、誰でも使用できる英語の CAN-DO リスト作成に関して、積極的に現場の先生方に働きかけ合同で作成する試みは、応援したくなる内容であった。是非留萌市内の学校がそれを軸にして教育活動が出来ることを願っている。

前回の巻頭言にも記述した、文部科学省が2023年7月31日に「2023年度の全国学力・学習状況調査」を公表した中学校の英語問題は、いろいろと教育の課題が見えた調査結果だった。また、11月に世界的な語学学校運営企業のEF エデュケーション・ファースト（スイス）が、英語を母国語としない国・地域について2023年の「英語能力指数」ランキングを発表した。調査対象は113カ国で日本は過去最低の87位。若い世代の英語力低下が目立った結果になっている。このように昨年は、コロナ感染の収束状況と同時にあまりいい気持ちにならない調査結果が連続して発表された。現場で一生懸命教育活動に携わっている先生方にとっては、この調査や数字を出されると、やる気が失せてしまう。でも、今回の発表や報告を聞いて、奮闘されている先生方が沢山おられて、勇気ややる気をもらった。

小、中、高、大で教壇に立つ会員が、情報や手法を共有して、さまざまな領域と水準における英語教育の多様な実践と研究を行い、共に学んでいきたいと強く望んでいる。今後も皆様のご指導、ご支援を一層賜りますようお願い申し上げます。

<実践報告 1 >

「多様な視点で地域を捉える英語を通じた探究学習

— 苫小牧高専 English Camp の取り組み —

報告者：鈴木 修平 先生（苫小牧工業高等専門学校）

谷口 陽子 先生（苫小牧工業高等専門学校）

発表概要

（鈴木先生）2年前に高専に赴任し、都市・環境系の担任をしました。工学を専門とする学校で私自身が何ができるかを模索している時に、5年生の卒業研究に関わる機会をいただきました。本学には5つの専門の他にフロンティアコースという分野があり、企業や行政と連携して地域の課題解決に取り組んでいます。例えば、学内の放置自転車を利用してシェアサイクルを運営するという取り組みをし、学校祭の時に無料で自転車を貸し出す実証実験を行いました。この取り組みは地域の目に留まり、苫小牧民報さんや道新さんに取り上げられました。その後、英語の教員として学生の教育を支えたいと考えていた頃に、2021年に谷口先生を中心として始められた English Camp を一緒にしませんかとお声がけいただきました。その時の様子を谷口先生から説明いただきます。

（谷口先生）わたしは工学系の教員で、語学の教員ではありません。2021年から English Camp が始まったのですが、立ち上げの動機はコロナ禍でそれまで毎年企画していた留学がキャンセルとなり、学生が外に出る機会が全くなくなってしまったことによります。その代替案として、苫小牧で留学経験のようにネイティブスピーカーの人たちと話す機会を与えられないか考えました。2021年度は学校行事として English Camp を立ち上げました。苫小牧市から若い人たちが楽しめる企画はないかのご相談があり、学生の視点で苫小牧市を盛り上げようというのが最初のミッションでした。2022年度は学校行事としてではなく、有志の教員で取り組むことになり、赴任されたばかりの鈴木先生にもお声がけしました。今年度で English Camp は3回続いています。

（鈴木先生）2021年の English Camp は苫小牧市の協力を得て、ALT を派遣してもらって実施しました。また苫小牧市から都市再生を扱ってはどうかという提案があり、私たちも地域とのつながりを求めていましたので、フェリーターミナルのある埠頭付近の開発を考えることにしました。メインとなるのは共同ワークショップで、埠頭付近のきらきら公園の模型に自分たちが考えたアイデアを付け加えていき、その模型について英語で説明をしました。2022年は、事前、当日、事後の課題を用意し、英語の4技能5領域をカバーしようということになりました。当日に加え、準備やまとめの機会があると英語の表現や地域貢献への考えも深まると思ったためです。テーマは自分が暮らす地域を紹介しようというものです。事前準備では苫小牧のとおきおきの場所を準備し、当日は持ち寄った場所を巡るベストのルートを考えました。まず、市内の10箇所の観光名所をバスで巡り「ときめきスポット BEST3」を決め、観光地の不足している点を洗い出しました。次に、その不足部分を補うためにはどうしたら良いかをグループで話し合わせました。英語でプレゼンテーションをするための準備をする際に、言葉に詰まっ

た時には仲間が助けたり、ネイティブスピーカーが質問をして内容を深めたりしました。その時の様子を地元のテレビが紹介してくれました。事後課題は、オリジナルの観光パンフレットを英語で完成させるというものです。事後課題を見ると英語表現が向上したことが伝わってきました。アンケート結果を見ても全体として評価が高かったです。学生の感想から、準備する期間や振り返りの時間の必要性を感じました。当日だけではなく、日頃から英語を使う機会が欲しいという声が学生からあり、教員からも放課後に英会話教室を開いてはどうかという意見がありました。「読む・書く・聞く・話すの全てを体験できた」という参加者の感想から、私たちの狙いを感じ取ってくれたと思っています。2023年のEnglish Campについてもご報告します。今年は趣向を変えて、「世界各国のクリスマス体験しよう」というテーマで行いました。当日は英語による寸劇と英語でのスイーツ作りをしました。事前に準備として英語での寸劇の流れを考えたり、スイーツのレシピを英語で書いたりしました。スイーツ作りの様子は苫小牧民報さんが取り上げてくれました。事後課題は、感想を写真付きで報告するというものです。そのレポートをもとに、現在は英字新聞を作成中です。

課外英語指導の流れをまとめます。まずEnglish Campを立ち上げました。苫小牧市の支援を得てALTを講師として派遣してもらっています。普段からスピーキングの機会に触れてもらった方が良くということで、昨年からは週に1回英会話教室を開き、スピーキングの指導に努めています。ここに集まっている学生が中心となり、苫小牧市との姉妹都市であるニュージーランドとの交流事業に参加したり、海外協定校に派遣されたり、高専の英語プレゼンテーションコンテストに参加したりしています。最近では北海道日米協会とのつながりができて、国際ユースフォーラムの中でインターナショナルスクールの生徒と英語で交流しました。このような学生たちが、学内で国際交流の輪を広げていってくれることを願っています。

Q:「2022年の活動で作成したパンフレットは、その後どこかで活用したのか」

A:「苫小牧市にも伝えて情報は共有しているが、まだ活用には至っていない。しかし、豪華客船で苫小牧港を訪れる人が学生との交流を楽しんでいるので、もう少しブラッシュアップしていけば非現実的ではないと考える」

Q:「プロジェクト型の英語の授業ということだったが、先生があまりにも口を出してしまうと学生の達成感がないようなケースもある。今回のケースは学生がどれくらい主体的にやっていたのか教えて欲しい」

A: (鈴木先生)「基本的に学生に指示を出して、パンフレットについては見本を見せたくらいで指導はあまりしていない。手取り足取りしない方が、学生が自由に作ってくれた」

(谷口先生)「英語を能動的に使うには、何が必要なのかを考えた。まず一つ目は、自分のことを英語で発信したいという思いを作ること。二つ目は、実技としてレベルアップしてそれを実感させること。大人が考えると型にはまってしまいが、学生のすることを全て肯定して任せました」

Q:「生徒の新規性が見られた場面はあったか」

A:「参加学生が英語での活動に活発に取り組むようになり、他の教員からそのような学生が有益な発言をし、授業の雰囲気をよくしていると聞いている」

(文責 三浦)

<実践報告 2>

「地域とともに地域で学び社会と繋がる」

報告者：森長 大輔 先生（北海道上川高等学校）

発表概要

最初に『自己紹介』をします。「好きな言葉」として「意思（志）あれば、道あり」“Where there is a will, there is a way”と、「関心のあること」としては、国際理解教育、ICT、ノンフォーマル教育、SDGs です。

『上川高校の概要』ですが、道内初中高連携一貫校、習熟度別学習を特色としています。また、生徒会の令和3年度のスローガンは「Change!!～変化を恐れない～」です。学校目標の中には「人間性豊かでたくましく生きる人格を育成する」という一節があります。スクール・ミッションとしては、「社会性や豊かな人間性を身につけた生徒」「地域の未来を創っていく生徒」「地域の課題を発見し解決に向けて貢献できる人材」「グローバルな視点で活躍するために必要な知識や技能、コミュニケーションの能力等を育成する」を掲げています。また学校の教育の特徴として、上川町役場より地域が抱える課題の共有と今後の展望紹介と題し「ホンモノのオトナと交流する機会」「自然教育」「デジタル教育」「上川町での自然フィールドでの教育展開」「教育機関のDX化」をあげています。

『英語科の特色』については、これまでの、外国語指導助手の方々と「英語同好会」の活動、さらに「道立学校間連携（旭川東高校）と」「上川町海外派遣研修（カナダやグアム）」「上川町児童・生徒主張のつどい」「事前語学レッスン」の様子を、画像とともにご紹介します。

『地域連携の実践』として、「上川町役場」との連携、「国際理解教育/開発教育指導者研修プログラム」に参加したこと、SDGs についての授業実践例を紹介させていただきます。

次に「コミュニケーション英語 I」の授業をご紹介します。VISTA の教科書のレッスン 5 から、課題は、『大雪国立公園（マダガスカル）の森林を守る方法は何か』を設定して、SDGs に関して、情報収集と様々な資料やチェックテストを用いて、生徒が SDGs について理解を深めるプロセスをお話しさせていただきます。

また「大雪国立公園層雲峡ビジターセンター」の職員の方から「上川町の生物多様性と SDGs の取り組み」についての授業も、画像とともにご紹介します。さらにフランス語の授業や JICA からの出前講座や地域のゲスト講師による「ガーナと協力隊」の特別授業、上川町地域おこし協力隊員による「デンマークの教育事情について」の特別授業、フランスの方による「多文化共生について」の特別授業も、それぞれ実施しました。再度生徒たちの SDGs 度をチェックしてみたところ、前回より点数が高くなる傾向となりました。

さらに、上川町役場の方による「森の DIY プロジェクト」と題するフィールド研修や、『JICA 地域理解プログラム』としての SDGs 探究活動についてご紹介します。JICA 本部と JICA 北海道、そして上川町役場職員による特別授業と、メインである「相互学習」の合計 6 時間のプログラムでした。夏休みの課題を経て、相互学習の中では、グループによるポスター発表の様子

を、画像とともに紹介します。このプログラムの様子は北海道新聞の記事やSTVのテレビでも紹介されました。

その後『高大連携』の2つの事例として、旭川市立大学のゼミと神田外語大学の先生による特別授業も紹介します。さらに『G+local ICT』と題して、JICA 海外協力隊のサポートを得て、モルディブの学校とオンラインで結び、交流した様子も紹介します。パソコン教室を利用した事前準備の様子も画像で紹介しています。

そして、私自身の『社会還元』の取り組みとして、JICA 北海道のイベントで、自分のモルディブでの青年海外協力隊（JICA 海外協力隊）としての経験をお話しました。また、別のイベントでは、パネルで他国の食文化を紹介する機会もありました。

最後に『まとめ』として、生徒たちの発達を促す3つのプロセスを紹介します。

1 自分のために

まず持続可能な社会をつくるために、身近にある諸問題を SDGs の 17 目標を手掛かりにして、自らの行動を変えなければならないことを自覚すること

2 わかると他の人に伝えられる

3 「人のため」につながる

注1：SDGs 度のチェックリストの書籍：一般社団法人日本協同組合連携機構（JICA）「1時間
でよくわかる SDGs と協同組合」

注2：夏休み課題の書籍：noa 出版「自分ごとからはじめよう SDGs 探究ワークブック ～旅して学ぶ、サステイナブルな考え方～」（文責 竹内）

< 研究報告 >

留萌市における小中高 CAN-DO リストを用いた英語力育成の取組について

報告者：滝本 有香 先生（留萌小学校・留萌管内教育研究所員）

発表概要

留萌市内の中学校英語科教員として勤務の後、2020 年から外国語科専科教員として留萌小学校に赴任し、現在は外国語専科と算数 TT 指導を担当しています。都市部ではない地域における英語力育成を考えるにあたり、公立小中学校はもとより高校との接続が重要と考え、留萌市小中高 CAN-DO リストを作成しています。

留萌市の学校は、小学校 5 校（中規模 2 校、小中規模 1 校、小規模 2 校）、中学校 2 校（各学年 2～3 クラス）、留萌高校（電気建築科、情報ビジネス科、普通科）があります。中学生の 1～2 割程度は管外（旭川、札幌など）の受験を希望しています。留萌市の小学校の英語指導については、留萌中校区 3 校では留萌中英語教員派遣があります。また、港南中校区では留萌小で専科教員が指導し、港北小ではオンライン指導を行っています。ALT は留萌市教委所属 2 名（小学校 1 名、中学校 1 名）、留萌教育局所属 1 名（高校専属）がいます。

小中高の CAN-DO リスト作成のきっかけは、学校力向上事業での成果の検証のために取り組んだ小学校複式外国語指導案作成をし、できることリストの作成をする取り組みでした。また、「小中の連携強化」、「協力体制が確立している（市教研、留英研）」、「保護者の立場で高校の取組を知ったこと」、「他市町村の小中高の連携の取組（雨竜町、滝川高校）」、「留萌市の英検助成金の開始」などが、今回の CAN-DO リスト作成の背景にありました。

小中高の CAN-DO リスト作成では、「実際に使用できるもの（作っただけにならない）」、「誰でも使えるもの（専科や英語が得意な先生だけのためのものにならない）」、「とりあえず、まずは作ってみる！（修正をかける前提、完璧を求めない）」といった点に気を付けています。

留萌市小中高 CAN-DO リストの作成は、4年間の計画で、現在2年目です。4年目には、外国語指導がスタートした時の生徒が高校3年生になります。1年目は、高校から資料提供を依頼し、高校の CAN-DO リストを頂きました。また、ALTにも協力を仰ぎ、教師向けの CAN-DO リストを作成しました。2年目の今年度は、市内小中学校で CAN-DO リストの試用を開始しています。

今後は、「作成したリストの保護者配付」、「作成したリストの修正」、「高校との交流の本格化（2年後の本格的交流を目指す）」、「小中高の英検受験の人数増」、「パフォーマンステストの充実」を目指しています。 (文責 杉浦)

お知らせ

◆研究会の開催日（予定）について

第13回研究会は2024年6月頃に開催することを予定しております。今後、研究会で取り上げたいテーマなどがありましたら、是非ご意見をお寄せください。

◆会員募集について

実用英語教育学会では、新会員を募集しております。年会費は4,000円です。会員の皆様は、研究会や大会の参加費が無料になる他、口頭発表および論文発表の発表資格を得ることができます。詳しくは、実用英語教育学会ホームページ (<http://spelt.main.jp/>) をご覧ください。

◆編集後記

今回のご発表は苫小牧、上川、留萌で教育活動を行っている先生方による、その土地だからできる英語教育について多くの示唆に富んだものでした。昨年度7月の研究会では「AIが発展していく中で人間の教員でなければいけないこと」を感じましたが、今回の研究会ではコロナ禍の制約がなくなった今、地域の規模にかかわらず特徴ある教育実践とその成果の共有が求められていると感じました。(山崎)

実用英語教育学会

編集: *SPELT Newsletter* 編集委員 (山崎秀樹)

発行: 2024年3月31日

事務局: 〒065-8567 札幌市東区北16条東9丁目1番1号

札幌大谷大学 社会学部 地域社会学科 石川希美 研究室内

TEL: 011-742-1651(代) Fax: 011-742-1654(代)

Email: spelt.info@gmail.com *を@にしてください。